The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	明解系アクセント辞典における4つの漢字で表記される語のアクセント
Author(s)	陳, 曦
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2018, 2017, p. 27-37
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/69990
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

明解系アクセント辞典における
４つの漢字で表記される語のアクセント

陳　曦

要旨　本稿は陳曦(2017b)に見られた 4 つの漢字で表記される語の融合・非融合に関する傾向がアクセント辞典全体においても観察できることを確認し，詳細を知るために，明解アと新明解アの全頁を調べたものである。その結果，形態構造が 2+2 字で，前部も後部も漢語の場合，明解アと新明解アのどちらにおいても，語数が最も少ないのが融合・非融合両方，次いで非融合だけ，そして最も多いのが融合だけ，となった。そして，数の上では融合だけの語が圧倒的に多かった。また，2 冊ともに 4 つの漢字で表記される語（形態構造が 2+2）の中で，アクセントの融合・非融合という記載に変化のある語が少ないことが分かった。明解系アクセント辞典 2 冊の全頁を調べることで陳曦(2017b)の傾向をおおよそ確認できたと言える。

1 はじめに

日本語の複合語には，［チュ┌ーゴクミ┐ヤゲ］[1]（中国土産）［ジ┌コボ┐ーエー］（自己防衛）のようにアクセントが 1 つの中高型アクセントに融合する（以下，「融合アクセント」）ものと，［┌チュ┐ーゴク┌ナ┐ンブ］（中国南部）［┌オ┐ーザボ┌ーエー］（王座防衛）のように融合しない（以下，「非融合アクセント」）ものがある。

しかし，これまでに筆者が調べた 4 字漢語の一部にアクセントのゆれ（融合・非融合両方の発音が可能）が観察されている（陳曦 2017a など ; 例 :「官僚養成」の融合アクセント［カ┌ンリョーヨ┐ーセー］と非融合アクセント［カ┌ンリョーヨーセー］）。なぜ 1 つの語に 2 種類の発音があるのかについて，陳曦(2017b)では，元々非融合アクセントで発音されていた複合語が融合アクセントへと変化（統一）していく途上にあるため，2 種類のアクセントが混在しているのではないかという可能性を提示し，その仮説を検証するために複数のアクセント辞典を比較した。

具体的には, 陳曦(2017b)において, NHK 系の 2 冊[2]と明解系の 2 冊, 計 4 冊のアクセント辞典の「ア」～「カ」で始まる語（各辞書の約 1/5 の頁数）を調べた。その結果，どの系列においても 4 つの漢字で表記される語の中で，アクセントの融合・非融合の記載に変化のある語はあまり多くないことが分かった。また，数少ない記載変化しているものの中に，融合へ向かう記載変化に加え，非融合への記載変化も観察された。さらに，『NHK 日本語発音アクセント新辞典』(2016)でも『新明解日本語アクセント辞典』(2010)でも，4 つの漢字で表記される語の中，非融合アクセントの発音を含む語の割合が低いことが分かった。

---

1 第 1 章では，陳曦(2017a)などと同様に，角括弧内の表音カナに付けられている記号「┌」で上昇，「┐」で下降を表わす。
2 『日本語アクセント辞典』(1943)と『NHK 日本語発音アクセント新辞典』(2016) 。

こうした陳曦(2017b)に見られる傾向がアクセント辞典の全頁を調べた場合にも観察できることを確認し，詳細を知るために，今回は『明解日本語アクセント辞典』と『新明解日本語アクセント辞典』の全頁を調べた。

2 方法

2.1 使用辞典

『新明解日本語アクセント辞典』の「序」に「若い人たちの使うアクセントも大幅に取り入れ」てあるという説明があることで，記載内容に変化があると考えられるため，以下の 2 冊のアクセント辞典を使用した。

① 明解日本語アクセント辞典　第二版　　1981 年（初版 1958 年）
（以下「明解ア」）

② 新明解日本語アクセント辞典　CD 付き　　2010 年（新明解日本語アクセント辞典 2001 年[3]）
（以下「新明解ア」）

2.2 対象語

2 冊のアクセント辞典の中にある 4 つの漢字で表記されている語とそのアクセント型を抽出した。

前回(陳曦 2017b)と同様，大きな傾向を探るために，まず手始めに語種や形態構造を制限せず，形態構造が 2+2 字の語だけではなく，3+1 字（奥入瀬川）と 1+3 字（女歌舞伎）の語も併せて抽出した。

そのうち，形態構造が 2+2 字の語についてみると，前部と後部の語種の組み合わせには以下のタイプがある。

1）　前部も後部も漢語[4]　　一国一城　イッコクイチジョー
2）　前部も後部も漢語ではない　　大和撫子　ヤマトナデシコ
3）　前部が漢語，後部が漢語ではない　　外国為替　ガイコクカワセ
4）　前部が漢語ではない，後部が漢語　　秋雨前線　アキサメゼンセン

また，以下，適宜，形態構造が2+2字で，語種の組み合せが前部も後部も漢語（つまり4つの漢字が全部音読み）の語を分析する場合がある。

なお，省略に関して，次の a のように見出し語である 4 字語の後に，省略される以前の形とそのアクセントが記載される場合と，b のように省略された形の語が見出し語で，省略される以前の形である 4 字語がその後にアクセントと一緒に記載される場合は, 両方の習得規則が付されているため対象外としたが，c.のような場合は習得規則が 1 つのみ付されているため対象とする。

a. ウジシュ˥ーイ　宇治拾遺 ＜ ウジシュ˥ーイモノガ˥タリ　宇治拾遺物語　→15,12
b. ローキン　労金 ＜ ロードーキ˥ンコ　労働金庫　→10,15
c. ガクジュツカ˥イギ　学術会議 ＜ 日本学術会議　→15

3 『新明解日本語アクセント辞典』の刊行が 2001 年で，CD が付いた『新明解日本語アクセント辞典　CD 付き』の刊行が 2010 年。
4 これまで(陳曦 2017a など)筆者が調査した後部要素が状態や動作をあらわす 4 字漢語はここに入る。

表１　抽出した語数

	明解ア	新明解ア
抽出語数	3705	3934
共通語数[5]	3411	
全収録語数	64000	75000
抽出語数/全収録語数	5.8%	5.2%

また，同じ表記の語ではあるが，読み方が違うことで 2 つの見出し語としてあがっている場合（例：「黄色人種」［オーショクジ˥ンシュ］(法則 15)（新明解ア p.97）と，「黄色人種あコーショクジ˥ンシュ］［オーショクジ˥ンシュ］(法則 15)（新明解ア p.272）），2 つの語として数える。

2.3 抽出した語数

明解アと新明解アから抽出した対象語数などを表 1 に示す。

2.4 記号について

以下，次の記号を使う。

˥　下がり目[6]　　キ　母音無声化　　ガ　ガ行鼻音　　・　切れめ[7]

2.5 複数のアクセントがある場合の順序について

明解アと新明解アは，二通り以上のアクセントがあるものに対し，「標準アクセントとして望ましいと思われる方を先にして併記」し，「年代的に新しいアクセントや，伝統的で古めかしいアクセントの層の目立つものに限り，((新は…))，((古は…))，((もと…))のように示し」ている。

3 結果

3.1 明解アと新明解アにおける融合・非融合両方の語と非融合だけと融合だけの語

明解アと新明解アには，語の後にアクセント習得法則の番号が付されている。アクセントの融合・非融合と最も密接な関係があるのは次の習得法則 97，98，99 だと思われる。その解説を下に示す。

97　分離文節　二つ以上の文節を続けて用いられる場合，一つ一つの意味をはっきり表わすように発音すれば，各の文節が分離してそのアクセントどおりに発音される。

98　接合文節　日常の会話では，一つ一つの文節をきり離して発音するよりも，軽く続けて一語のように発音する場合が多い。このように文節が接合される場合には，前部の文節はアクセントどおり発音されるが，後部の文節は特に強調しようとしない限り，次のように

5 明解アにおける表記が 4 つの漢字であっても，新明解アにおける表記が 4 つの漢字ではない場合（例：「押込強盗」（明解ア）と「押込み強盗」（新明解ア）），共通語数にカウントしない。

6 明解アと新明解アでは「高く発音する部分」を上線で示し，「次が低く発音される場合」に「˥」が付されている。本稿では便宜上，「次が低く発音される場合」（つまり，下がり目）だけを示す。

7 「連語などアクセントに切れめがある場合には，そこに・を置き，区切り」としている。

表２　文節のアクセントの法則一覧（秋永一枝(2010)「アクセント習得法則」(106)）

	分離文節(97)	接合文節(98)	結合文節(99)
自縄自縛	ジジョー・ジバク 〔ジジョー(・)ジバク〕	ジジョージバク	ジジョージバク
自由自在	ジユー・ジザイ 〔ジユー(・)ジザイ〕	ジユージザイ	ジユージザイ
青息吐息	アオイキ・トイキ 〔アオイキ(・)トイキ〕	アオイキトイキ	アオイキトイキ
白河夜船	シラカワ・ヨフネ 〔シラカワ(・)ヨフネ〕	シラカワヨフネ	シラカワヨフネ
否が応でも	イヤガ・オーデモ	(イヤガオーデモ)	イヤガオーデモ
言わぬが花	イワヌガ・ハナ 〔イワヌガ(・)ハナ〕	イワヌガハナ	イワヌガハナ
是が非でも	ゼガ・ヒデモ 〔ゼガ(・)ヒデモ〕	ゼガヒデモ	ゼガヒデモ
飲まず食わず	アマズ・クワズ 〔アマズ(・)クワズ〕	アマズクワズ	ノマズクワズ
年がら年中	ネンガラ・ネンジュー 〔ネンガラ(・)ネンジュー〕	ネンガラネンジュー	ネンガラネンジュー
件の如し	(クダンノ・ゴトシ)	クダンノゴトシ	クダンノゴトシ

型の変化をおこす場合が多い。（本稿の表２参照）

99　結合文節　まれに慣用句などで，二つ以上の文節が続いて固定した意味を表わすようなものには，いつもひと続きに発音する傾向がある。この場合は，後部の文節が平板式ならば後部の第　拍まで高く，後部の文節が起伏式ならば，後部の文節のアクセントの高さの切れめまで高くなる。特に前部が平板式のものは結合文節となりやすく，全体が中高型になるものが多い。

複合語全体が１つの中高型アクセント（中高型融合）になるかどうかという観点からみると，習得法則の97「分離文節」と98「接合文節」が筆者の言う「非融合アクセント」にほぼ相当し，99「結合文節」が筆者の言う「融合アクセント」にほぼ相当すると思われる。

また，法則15も後部要素が漢字２字の複合語の融合アクセント時の法則となりうる。習得法則15は「後部が漢語二字の結合名詞」である。明解アと新明解アによると，「前部には関係なく，後部によりアクセントが決定される。すべて規則型のみ」だとされる。法則15は後部が中高型であるかにより大きく２種類に分けられる。すなわち，後部が平板型・尾高型・頭高型の語の場合は，「後部の最初の第一拍まで高い」のに対し，後部が中高型である語の場合は，「もとの高さの切れめまで高い」。ただし，前者に関しては，「前・後部とも二拍以下の語には例外が多いが，四拍語は多く平板型になる」と記載されている。つまり，法則15は前・後部とも二拍以下の語以外のものは１単位の中高型アクセントになるとされ，これは筆者の述べる「融合アクセント」にほぼ相当すると思われる。

なお，両辞典において法則97, 98, 99は「文節アクセントの法則」，法則15は「単語のアクセントに関する法則」という立場をとっているが，４つの漢字で表記されているもの，特に形態構造が2+2字のものに関しては，法則99「結合文節」と法則15「後部が漢語二字の結合名詞」との間で，区別をつけるのは難しいと考えられる。

明解アと新明解アに共通の語で，さらに形態構造が 2+2 字であり，語種の組み合せが前部も後部も漢語（つまり４つの漢字が全部音読み）[8]の語が筆者の計算では2456[9]語ある。そのうち，明解アと新明

8 漢字が音読みであるかどうかは，漢字辞典オンライン(http://kanji.jitenon.jp/)で当該漢字の項目の「音読み」欄にその発音があるかどうかを調べ，それを判断基準とした。併せて見出し語の後の習得法則も参考にした。両者の判断が異なる場合，当該語における当該漢字は音読みとみなしていない。

解アにおいて，法則 97, 98, 99[10], 15[11] の 4 つの法則のうち 1 つ以上が記載されている語の法則の組み合せと語数を表 3 に示す。そして，①非融合だけ，②融合・非融合両方，③融合だけのように分け，それぞれの語数などをあらためて表 4 に示す。

表 3　明解系における習得法則 97, 98, 99, 15 の組み合せ
（2 冊共通で，形態構造が 2+2 字で，前部も後部も漢語の語）

	法則	明解ア語数	新明解ア語数	語例	
①非融合だけ 97, 98 のうちの 1 つ以上	a. 法則 97 のみ	4	4	雄蝶雌蝶	オ˥チョー・メ˥チョー
	b. 法則 98 のみ	115	112	営業停止	エーギョーテーシ
	c. 法則 97,98	149	160	意気投合	イ˥キ（・）トーゴー[12]
	d. 法則 98,97	5	5	一網打尽	イチモーダジン イチ˥モー（・）ダジン
	計	273	281		
②融合・非融合両方 97, 98 のうちの 1 つ以上と 99 或は 15	a. 法則 99 が前	32	28	花鳥風月	カチョーフ˥ーゲツ カ˥チョー・フ˥ーゲツ
	b. 法則 99 が後	35	42	永世中立	エーセーチューリツ エーセーチュ˥ーリツ
	c. 法則 15 が前 (15,98)	2	2	早期診断	ソーキシ˥ンダン ソ˥ーキシンダン
	d. 法則 15 が後 (98,15)	1	1	千手観音	セ˥ンジュカンノン 新はセンジュカ˥ンノン
	計	70	73		
③融合だけ	99 のみ	19	20	驚天動地	キョーテンド˥ーチ
	15 のみ	1889	1879	愛他主義	アイタシュ˥ギ
	計	1908	1899		
合計		2251	2253		

9 形態構造が 2+2 字であるか，語種の組み合せが前部も後部も漢語であるかについての判断が困難な語を除外した。
10 法則 99c は法則 99 としてカウントしていない。
11 法則 15a,15c,15d は法則 15 としてカウントしていない。
12 明解アと新明解アでは，以下の①②のように 2 種類の発音があると判断したものを，「スペースの節約上」矢印の右のように書くことで示している。（本稿の表 2 参照）

千載一遇　①センザイイチグー　②センザイイチグー　⇒　センザイ（・）イチグー
自画自賛　②ジガジサン　②ジガジサン　⇒　ジガ（・）ジサン

本稿ではこれらの表記を［センザイ(・)イチグー］［ジ˥ガ(・)ジサン］の形で書きあらわすことにする。

表４　明解アと新明解アにおける非融合だけ，融合・非融合両方，融合だけの語数
（2 冊共通で，形態構造が 2+2 字で，前部も後部も漢語の語）

	明解ア		新明解ア	
①非融合だけ	273	12.1%	281	12.5%
②融合・非融合両方	70	3.1%	73	3.2%
③融合だけ	1908	84.8%	1899	84.3%
合計	2251		2253	

表 4 から分かるように，①②③全体に占める割合を見ると，明解アも新明解アも，②融合・非融合両方が最も低く，①非融合だけがそれに次ぎ，③融合だけが最も高くなる。しかも，融合だけの語のそれぞれの割合は 84.8%と 84.3%と圧倒的に高い。

明解アでは，①非融合だけの語が 12.1%，②融合・非融合両方の語が 3.1%あり，両者を合わせると非融合の発音を含む語が全体の 15.2%を占めている。また，新明解アでは，①非融合だけの語が 12.5%，②融合・非融合両方の語が 3.2%あり，非融合の発音を含む語が全体の 15.7 %を占めることになる。

ここから，明解アと新明解アでは（少なくとも，4 つの漢字で表記されている語で，さらに形態構造が 2+2 字であり，語種の組み合せが前部も後部も漢語の語においては），非融合アクセントの所属語数が少ないことが読み取れる。

3.2 アクセントの記載変化

新明解アと明解アで共通している 4 つの漢字で表記されている語は 3411 語で，そのうち，形態構造が 2+2 字の語が 3116 語ある。これらの語の中で，2 冊において融合・非融合アクセントのパターンに違いがある項目を表 5〜8 に示す。表 5 と表 7 はそれぞれ「非融合へ」と「融合へ」の記載変化である。表 6 と表 8 はアクセント記載が 2 冊とも同じだが，アクセントの変化の過程を示す「非融合へ」/「融合へ」の事例である。

習得法則の 97「分離文節」と 98「接合文節」が筆者の言う「非融合アクセント」にほぼ相当するが，もし切れめがある場合の方が切れめがない場合より複合の度合いが低いと考えれば，切れめのない 98 の方が複合の度合いが高いと考えられる。となると，法則 97， 98， 99 (15)の順に複合の度合が強いということになる。そのため，「百花斉放」のような法則 98［ヒャ┐ッカセーホー］（明解ア）から法則 97， 98［ヒャ┐ッカ(・)セーホー］への変化（新明解ア）に対しても「非融合アクセントへの記載変化」として扱う。

表 5〜8 から分かるように，明解アと新明解アにおいて融合・非融合アクセントのパターンに違いのある項目は非常に少ない。非融合への記載変化 16 例（うち 14 例が前後とも漢語）と非融合への事例 1 例を合わせて 17 例，融合への記載変化 13 例（うち 9 例が前後とも漢語）と融合への事例 8 例（うち 7 例が前後とも漢語）を合わせて 21 例，計 38 例の変化が見られた。ここから，4 つの漢字で表記されている語で形態構造が 2+2 字の語においては，融合への記載変化も非融合への記載変化も少なく，融合・非融合についての記述が比較的安定していることが分かる。

表５　明解系における記載変化――非融合アクセントへ

		明解ア　(1981)		新明解ア　(2010)	
		アクセント	法則	アクセント	法則
1	営業停止 (99 がなくなる)	エーギョーテーシ エーギョーテ˥ーシ	98, 99	エーギョーテーシ	98
2	尾形光琳[13] (古は 98 もある)	オ˥ガタ・コ˥ーリン	22, 24	オ˥ガタ・コ˥ーリン 古はオ˥ガタ(・)コーリン	22, 24, 27
3	開店休業 (99 がなくなる)	カイテンキューギョー カイテンキュ˥ーギョー	98, 99	カイテンキューギョー	98
4	上方贅六[14] (98 相当が加わる)	カミガタゼ˥ーロク	15d	カミガタゼ˥ーロク カミガタゼーロク˥	15d
5	最新流行 (99, 98 の順番が逆転)	サイシンリュ˥ーコー サイシンリューコー	99, 98	サイシンリューコー サイシンリュ˥ーコー	98, 99
6	祭政一致 (99, 98 の順番が逆転)	サイセーイ˥ッチ サイセーイッチ	99, 98	サイセーイッチ サイセーイ˥ッチ	98, 99
7	縦横無尽 (99, 98 の順番が逆転)	ジューオーム˥ジン ジューオ˥ー(・)ムジン	99, 98, 97	ジューオ˥ー(・)ムジン ジューオーム˥ジン	97, 98, 99
8	自由自在 (99, 98, 97 の順番が逆転)	ジユージ˥ザイ ジユ˥ー(・)ジザイ	99, 98, 97	ジユ˥ー(・)ジザイ ジユージ˥ザイ	97, 98, 99
9	神経過敏 (99, 98, 97 の順番が逆転)	シンケーカ˥ビン シ˥ンケー(・)カビン	99, 98, 97	シ˥ンケー(・)カビン シンケーカ˥ビン	97, 98, 99
10	早期診断 (98 が加わる)	ソーキシ˥ンダン	15	ソーキシ˥ンダン ソ˥ーキシンダン	15, 98
11	二律背反 (99 がなくなる)	ニリツハ˥イハン ニ˥リツ(・)ハイハン	99, 98, 97	ニ˥リツ(・)ハイハン ニリツハイハン	97, 98

13 法則 22 は「姓」，24 は「癒合語の男・女子名」，27 は「複合の人名」である。「尾形光琳」については，2 冊共通の［オ˥ガタ・コ˥ーリン］は法則 97 に，新明解アの「古」の［オ˥ガタ(・)コーリン］は法則 97,98 に相当すると考えられる。新明解アにおいて，新明解アにおいて， 2 形あるうちの最初に記された方は法則 97 で，「古」は 97, 98 の両方がある。つまり， 98 がなくなったに相当するということになる。ただし，これは後部要素「光琳」のアクセント変化によるものかもしれない。表 6 の「岡倉天心」もそうである。

14 「上方贅六」については，その前部の「上方」は 2 版とも［カミガタ］［カミガタ˥］と，後部の「贅六」は 2 版とも［ゼーロク］［ゼーロク˥］［ゼーロ˥ク］と記載されていることから，［カミガタゼーロク˥］は法則 98「接合文節」に，［カミガタゼ˥ーロク］は法則 99「結合文節」に似ていると考えられる。

12	任意出頭 (98 が加わる[15])	ニンイシュ┐ットー	15	ニンイシュ┐ットー ニ┐ンイシュットー	99, 98
13	百花斉放 (97 が加わる)	ヒャ┐ッカセーホー	98	ヒャ┐ッカ(・)セーホー	97, 98
14	百家争鳴 (97 が加わる)	ヒャ┐ッカソーメー	98	ヒャ┐ッカ(・)ソーメー	97, 98
15	老少不定 (98 が加わる)	ローショーフ┐ジョー	99	ローショーフ┐ジョー ローショーフジョー	99[16] (99, 98?)
16	和洋折衷 (97 が加わる)	ワヨーセ┐ッチュー ワヨーセッチュー	99, 98	ワヨーセ┐ッチュー ワヨーセッチュー ワ┐ヨー(・)セッチュー	99, 98, 97

表６　明解系における非融合アクセントへの事例(アクセント記載が２冊とも同じ)

		明解ア　(1981)		新明解ア　(2010)	
		アクセント	法則	アクセント	法則
1	岡倉天心 （古は 98 もある）	オカ┐クラ・テ┐ンシン 古はオカ┐クラ(・)テンシン オカクラテ┐ンシン	22, 24, 27	オカ┐クラ・テ┐ンシン 古はオカ┐クラ(・)テンシン オカクラテ┐ンシン	22, 24, 27

表７　明解系における記載変化――融合アクセントへ

		明解ア　(1981)		新明解ア　(2010)	
		アクセント	法則	アクセント	法則
1	青息吐息 （古は 97 もある）	アオイキト┐イキ アオ┐イキトイキ	99, 98	アオイキト┐イキ 古はアオ┐イキ（・）ト┐イキ	99, 98, 97
2	有象無象 (97 がなくなる)	ウゾーム┐ゾー ウゾ┐ー（・）ム┐ゾー	99, 98, 97	ウゾーム┐ゾー ウゾ┐ームゾー 古はウ┐ゾームゾー	99, 98
3	一寸法師[17] （新は 99 相当）	イッス┐ンボーシ イッスンボ┐ーシ	15	イッス┐ンボーシ 古はイッス┐ンボシ 新はイッスンボ┐ーシ	15

15 法則98の[ニンイシュ┐ットー]が加わる他, [ニ┐ンイシュットー]というアクセントの法則が15から99になっている。

16 「老少不定」については，その前部の「老少」は明解アに記載がなく，新明解アには[ローショー]と記載されているが，後部の「不定」は2版とも[フジョー]と記載されていることから，新明解アの[ローショーフジョー]は法則98「接合文節」の可能性が高いと思われる。つまり，実は新明解アのこの語の法則は「99, 98」なのではないかと考えられる。

17 「一寸法師」については，その前部の「一寸」はこの2版とも[イッス┐ン]と記載されていることから，[イッス┐ンボーシ]は法則98「接合文節」に，[イッスンボ┐ーシ]は法則99「結合文節」に似ていると考えられる。

4	景気変動 (99 が加わる)	ケーキヘンドー	98	ケーキヘンドー ケーキヘ˥ンドー	98[18] (98, 99?)
5	四面楚歌 (99 が加わる)	シ˥メン(・)ソ˥カ	97	シ˥メン(・)ソ˥カ シメンソ˥カ	97, 99
6	睡眠不足 (98，99 の順番が逆転)	スイミンフソク スイミンブ˥ソク	98, 99	スイミンブ˥ソク スイミンフソク	99, 98
7	生産過剰 (99 が加わる)	セーサンカジョー	98	セーサンカジョー セーサンカ˥ジョー	98, 99
8	全会一致 (99 が加わる)	ゼンカイイッチ	98	ゼンカイイッチ ゼンカイイ˥ッチ	98, 99
9	鶴屋南北[19] (99 相当が加わる)	ツル˥ヤ・ナ˥ンボク	22, 23	ツル˥ヤ・ナ˥ンボク ツルヤナ˥ンボク	22, 23, 27
10	難行苦行 (97 がなくなる)	ナンギョーク˥ギョー ナ˥ンギョー・ク˥ギョー	99, 97	ナンギョーク˥ギョー	99
11	新田義貞[20] (98 相当が加わる)	ニ˥ッタ・ヨシサ˥ダ	22, 24c	ニ˥ッタ・ヨシサ˥ダ ニッタ(・)ヨシサ˥ダ	22, 24c, 27
12	認識不足 (99 が加わる)	ニンシキフソク	98	ニンシキフソク ニンシキブ˥ソク	98, 99
13	山辺赤人(明解ア) 山部赤人(新明解ア)[21] (98 相当が加わる)	ヤ˥マベノ・アカ˥ヒト	22, 24	ヤ˥マベノ・アカ˥ヒト ヤマベノアカ˥ヒト	22, 24, 27

表８　明解系における融合アクセントへの事例(アクセント記載が２冊とも同じ)

		明解ア　(1981)		新明解ア　(2010)	
		アクセント	法則	アクセント	法則
1	一攫千金[22] (99 相当が加わる)	イッカク(・)センキン 新はイッカクセ˥ンキン	39	イッカク(・)センキン 新はイッカクセ˥ンキン	39
2	一刻千金	イッコク(・)センキン	39	イッコク(・)センキン	39

18 「景気変動」については，その前部の「景気」は 2 版とも[ケーキ]，後部の「変動」は 2 版と[ヘンドー]と記載されていることから，新明解アの[ケーキヘ˥ンドー]は法則 99「結合文節」だと思われる。つまり，実は新明解アのこの語の法則は「98,99」なのではないかと考えられる。

19 注 9 で述べたように，法則 22 は「姓」，27 は「複合の人名」である。そして，法則 23 は「単純語・転成語の男・女子名」である。「鶴屋南北」の[ツル˥ヤ・ナ˥ンボク]は 97 に，[ツルヤナ˥ンボク]は 99 に相当すると考えられる。

20 「新田義貞」の[ニ˥ッタ・ヨシサ˥ダ]が 97 に，[ニッタ(・)ヨシサ˥ダ]は 97, 98 に相当すると考えられる。つまり，98 が加わったに相当する。ただし，これは前部要素「新田」のアクセントの変化によるものかもしれない。

21 「山辺赤人/山部赤人」の[ヤ˥マベノ・アカ˥ヒト]は 97 に，[ヤマベノアカ˥ヒト]は 99 に相当すると考えられる。

22 法則 39 は「畳語的な数詞 その他」である。「一攫千金」の[イッカク(・)センキン]は 97, 98 に，「新」の[イッカクセ˥ンキン]は 99 に相当すると考えられる。同表の「一刻千金」もそうである。

	(99 相当が加わる)	新はイッコクセ˥ンキン		新はイッコクセ˥ンキン	
3	嵯峨天皇[23] (新は 99 相当)	サ˥ガテンノー 新はサガテンノ˥ー	94	サ˥ガテンノー 新はサガテンノ˥ー	94
4	白河夜船 (新は 99)	シラ˥カワ(・)ヨフネ 新はシラカワヨ˥フネ	97, 98, 99	シラ˥カワ(・)ヨフネ 新はシラカワヨ˥フネ	97, 98, 99
5	神武天皇 (新は 99 相当)	ジ˥ンムテンノー 新はジンムテンノ˥ー	94	ジ˥ンムテンノー 新はジンムテンノ˥ー	94
6	千手観音 (新は 15)	セ˥ンジュカンノン 新はセンジュカ˥ンノン	98, 15	セ˥ンジュカンノン 新はセンジュカ˥ンノン	98, 15
7	仁徳天皇 (新は 99 相当)	ニ˥ントクテンノー 新はニントクテンノ˥ー	94	ニ˥ントクテンノー 新はニントクテンノ˥ー	94
8	明治天皇 (古は 98 相当)	メージテンノ˥ー 古はメ˥ージテンノー	94	メージテンノ˥ー 古はメ˥ージテンノー	94

4 まとめ

今回は陳曦(2017b)に見られた 4 つの漢字で表記される語の融合・非融合に関する傾向がアクセント辞典の全頁を調べた場合にも観察できることを確認し，詳細を知るために，明解アと新明解アの全頁を調べた。

その結果，形態構造が 2+2 字で，前部要素と後部要素が漢語である語は，明解アと新明解アのどちらにおいても，融合・非融合両方が最も少なく，次いで非融合だけ，融合だけ，という順に語数が多くなった。また，融合だけの語が数において圧倒的に多かった。換言すれば，非融合アクセントを含む語が少ないという結果となった。これは，前回(陳曦 2017b) 『NHK 日本語発音アクセント新辞典』(2016)と新明解アのそれぞれ 1/5 の分量を検討した際に見られた傾向が，今回明解系の 2 冊の全頁を調べることでおおよそ確認できたと言える。

また，今回調べた明解系の 2 冊に掲載されている 4 つの漢字で表記される語(形態構造が 2+2 字)の中には，アクセントの融合・非融合という記載に変化のある語が少ないことが分かった。数少ないアクセントの記載変化の中に，融合への変化に加え，非融合への変化も観察された。この点に関しても前回同様，明解アの 1958 年から新明解アの 2001 年の 40 年間ぐらいではアクセントの記載に変化がなくても全く不思議はないと思われる。また，辞書は規範を示すことが目的であるため，辞書におけるアクセントの記載が発音の実態を反映しているとは限らない。例えば，一番多く発音されるアクセントが 1

23 法則 94 は「人名及び一般名詞などについて意味をそえるもの」である。「天皇」など，「職名・称号の類のつくもの」については，「前の語が平板式なら接尾辞のアクセントの高さの切れめまで高い。前の語が起伏式の場合ならば前の語のアクセントを生かすが，接尾辞が起伏式の場合で慣用のもの一般，及び若い人人の間では，接尾辞の高さの切れめまで高い型で発音する傾向がみられる」という。「嵯峨天皇」の[サ˥ガテンノー]は法則 98 に，「新」の[サガテンノ˥ー]は法則 99 に似ていると考えられる。同表の「神武天皇」「仁徳天皇」もそうである。「明治天皇」については，[メージテンノ˥ー]は 99 に，「古」の[メ˥ージテンノー]は 98 に似ていると考えられる。

番アクセントとして採用されるとは限らないため，実際のアクセントの融合・非融合の変化はこうした辞書における記載の変化より多い可能性がある。

今後は NHK 系アクセント辞典も調べると共に，アクセント辞典における前後のアクセント型の組み合せと融合・非融合との関係も含めて検討していきたい。

参考資料

秋永一枝（編）(1981)『明解日本語アクセント辞典　第二版』三省堂.

秋永一枝（編）(2010)『新明解日本語アクセント辞典　CD 付き』三省堂.

陳曦(2017a)「後部要素が状態や動作をあらわす四字漢語のアクセント融合問題—統語的関係と意味の視点から—」『言語文化学 26』3–16，大阪大学言語文化学会.

陳曦(2017b) 「アクセント辞典から見る4字漢語で表記される語のアクセント—NHK系2冊と明解系2冊の『ア』～『カ』で始まる語を例に—」『言語文化プロジェクト2016音声言語の研究11』37-47，大阪大学言語文化研究科.

漢字辞典オンライン　http://kanji.jitenon.jp/